

マラーと二人の偉大な後輩たち

前島良雄
(音楽評論家) Yoshio Maejima

マラーと指揮者たちというテーマで書こうとすると、実にさまざまな話題があるのだが、今回は、ちょうど絶妙な時代に活躍したのでたいへん多くの録音が残されているために、19世紀生まれの「巨匠」指揮者の代表のような形で今日でも広く親しまれ続けている二人の指揮者について触れることにする。

その二人とは、ブルーノ・ヴァルター(1876~1962)と、オットー・クレンペラー(1885~1973)である。

この二人の指揮者とマラー本人、あるいはマラーの音楽との関係についても、例によって「伝説」がいろいろとまとわりついてしまっていて、それが無検証のままに何度も何度も引き写されて定着してしまっている。その「伝説」を検討して、真の姿に迫ってみたい。

ヴァルターとクレンペラーについては、今日では必ずと言ってもいいほど「マラーの弟子」という言葉がつけられる。時には、「高弟」などという表現も目にする。

本当にこの二人は、「マラーの弟子」なのか。

結論を先に書いてしまうならば、二人とも「弟子」ではない。まして「高弟」などというのはまったく的外れである。そもそもマラーには「弟子」と呼べる人物は存在しない。

まず、ヴァルターとマラーの関わりを見てみよう。

ヴァルターがマラーに初めて会ったのは1894年の夏の終わりのことであった。ハンブルク市立劇場の楽長であったマラーの下で、当時18歳であったヴァルターが助手として秋から働くことになったのである。

2年に満たないうちにヴァルターはハンブルクを離れることになるのだが、この間のマラーとの関係は、師と弟子の関係と言ったものではなくて、中川右介氏の言葉を借りると「上司と部下」の関係というほうが実情に近い。

その後マラーは1897年からヴィーン宮廷歌劇場の監督になるわけだが、ヴァルターはプレスラウ、プレスブルクなどを経てリガの歌劇場の指揮者となる(いずれの場合も



Mahler

マーラーの推薦が大きくものを言ったようである)。

ヴィーン宮廷歌劇場で獅子奮迅の活躍を開始したマーラーは、早々と1898年10月にヴァルターを自分の下に呼ぼうとする。ところが、マーラーの予想を完全に裏切って、ヴァルターはヴィーン行きを断ってしまう。一時的にマーラーは気分を害したようではあったが、二人の間の信頼関係が崩れるようなことはなかった。

そして、もう一度、1899

年10月にマーラーはヴァルターをヴィーンに招こうとするのだが、またしても断られてしまう。ヴァルターとしてはマーラーの意向に添いたいと考えたのだが契約の関係などもあってすぐには無理ということ

なのだった。マーラーがそれほどにヴァルターを自分の下に招きたいと考えたのは、彼がすでに完全に一人前の、そして、自分の音楽を確立した指揮者であったからであろう。二度にわたってマーラーからの招きを断ることになったときのヴァルターの不安な心情やうろたえぶりなどは、この時期に両親宛てた手紙に生々しく記録されていて興味深い。

ようやくヴァルターがヴィーン宮廷歌劇場のマーラーの下にやってくることができたのは1901年の秋であった。マーラー本人の使った

言葉によると、「副官」として全面的に信頼できる人物が欲しかったのである。1907年にマーラーがヴィーン宮廷歌劇場の監督を辞任することになるときまで、この二人の「司令官と副官」の関係は続いていくことになる。

以上のハンプルク時代、ヴィーン時代の、楽長および監督としてのマーラーの精力的な活動の詳細に関しては、拙著『マーラー輝かしい日々と断ち切られた未来』を参照していただけると幸いである。

「師弟関係」という言葉の意味を最大限に広く取るなら、あるいは、一種比喩的な意味で使うならヴァルターにとってマーラーはいわば「人生の師」というようなものではあったかもしれない。しかし、実際の二人の関係は「師弟」という言葉から普通思いつくかぶものとは違ったのである。

次にクレンペラーとマーラーの関係である。

1905年11月8日、ベルリンでマーラーの《交響曲第2番》がオスカー・フリートの指揮で演奏された。その時、舞台裏のアンサンブルの指揮をしたのが、当時20歳であったオットー・クレンペラーである。このコンサートの前後にクレンペラーはマーラーと言葉を交わすことができたらしい。「らし

い」と書いたのは、このマーラーとの出会いについてのクレンペラーの回想はいくつかあるのだが、それらが大きく食い違っているので、実際どうであったのかわからないからである。

さらに1907年に何度かベルリンとヴィーンで



Walter



Klemperer

会っている。この時にマーラーが書いてくれた推薦状のおかげで、クレンペラーはプラハのドイツ劇場で楽長の職に就くことができた。

1908年5月、皇帝フランツ・ヨーゼフのボヘミア王位60周年記念祝典コンサートでチェコ・フィルを指揮するためにプラハを訪れたマーラーにクレンペラーは会っている。また、同年9月、自作の《第7番》を初演するために再びプラハを訪れたマーラーのもとにも馳せ参じている。ただし、この時期のクレンペラーはプラハで楽長の職にあったのだから、わざわざ遠くからやってきたわけではない。

そして、1910年、《交響曲第8番》初演の前に（初演そのものは聴いていない）会ったのが、クレンペラーがマーラーに会った最後である。

というように、クレンペラーが、マーラーに直接会ったのは実は数えるほどの機会にすぎなかった。クレンペラーにとってマーラーは、尊敬すべき偉大な人物であり、自分を推薦してくれた大恩人であった。マーラーから見るとクレンペラーは有能な青年であり大いに期待していたから何かと面倒を見てやった後輩なのであった。しかしそこには師弟関係はない。

この二人の残したマーラーの音楽の録音には、「マーラーの弟子」であるがゆえに「マーラー直伝の真意」が実現されている、という趣旨のことがよく言われる。しかし、それは正しくない。ヴァルターとクレンペラーの残したマーラーの演奏が素晴らしいとすれば（私自身はたいへん素晴らしいと思っているが）、それは、ブルーノ・ヴァルターとオットー・クレンペラーという比類のない指揮者の固有の素晴らしさが発揮された演奏

だからなのである。例えば、クレンペラーの有名な極端にゆっくりとしたテンポで演奏された《交響曲第7番》の録音。あの異様なテンポは、決して「マーラー直伝」のなにかに基づいているというわけではなくて、クレンペラーの特異な晩年の様式の現れと考えるべきであろう。

また、この二人が「マーラーの弟子」であるという思い込みは、もう一つ別の面でも困った作用をしている。この二人がマーラーについて語ったり書き残したりしたものが無批判に受け容れられてしまうということである。

二人とも長寿に恵まれたので、晩年の写真や録音が多く残されている。そのため、ヴァルターに関しては温厚な人柄が、クレンペラーに関しては謹厳な人柄が、それぞれ強く印象づけられていることも、二人の残した言葉に疑いをもちにくくしているように思う。

クレンペラーの回想でいうと、マーラーに初めて会った時の自分の年齢が22歳となっていたり（本当は20歳）、《交響曲第7番》の初演が1909年9月となっていたり（本当は1908年9月）と、きわめて基本的なところでの間違いが散見される。同様の記憶ちがいはヴァルターの回想の中にも見られる。非常にわかりやすい例を一つだけ挙げると、1894年にハンス・フォン・ビューローの葬儀から得たインスピレーションで、《交響曲第2番》第1楽章の着想を得たというところである。

「マーラーの弟子」という思い込みを取り去ってこの二人の偉大な指揮者とマーラーについては考えたいものである。